

『火垂るの墓』を読んで

弘前大学教育学部附属中学校

三浦夏帆

戦争は魂すら不幸にする。死んでなお後悔と無念の思いのみを残し、魂は救済されない。ならば、戦争とは何なのか。私たちの命は、蚩のようにほかないもののなのに、どうして人間同士の殺し合いで命を無駄にしてしまうのか。どうすれば、

人類は戦争から卒業できるのか。私の戦争に対する疑問は無限に存在した。そんな私の心を動かしたのがこの本だった。表紙には、一人の少女が立っていた。この少女が「戦争」の本当の意味をさがす物語だと思い、この本を手にとった。

登場人物の清太は、何度自問しても答えを見つけないことができないのだ。節子を死なせたのは、自分の弱さなのか、戦争なのか、心の中に潜む悪なのか……。尊敬する海軍軍人である父が命を懸けた戦争。その父と母を殺した戦争。そして節子の命までも奪った戦争。戦争をただ絶対悪だと、全責任を押し付けられぬジレンマ。だから、後悔と悔しさ、無念さと共に、彼の魂は、何度も何度も繰り返す辛い世界へと戻つてしまふ。戦争が無くなった今でも、彼らの魂は今も問い続

「未だ無限の可能性を若者達から奪うもの、それは戦争か。戦争を起こした人なのか。争い傷つける心をもった私たちなのか。」と。

私は、戦争というと、人間同士の殺し合いで、多くの命を奪い、人類が滅亡していく、とても恐いものだと思つて生きてきた。あの時代を生き抜くのに、人々は自分のことだけで精一杯だから、他人のことをとても考えてあげられなくなるのだ。それは人のせいではなく、戦争そのものが皆の心を意地悪にする。戦争さえなければ、皆心優しい人間なのに。それに、よく考えてみると、西宮の小母さんが、清太を叱るのも当たり前のことではないだろうか。小母さんが口に出す言葉は一見して残酷だが、もっともなことを話している。世話になつてゐるのに、二人は「ありがとう」も言わずにいた。しかし、働いてあげるところか、感謝の気持ちさえも伝えずに、ただ家にこもつていた。二人は母を無くしかわい

そうだが、他人の気持ちをもっと考えるべきだと感じた。世界は一人で住んでいるのではなく、人々はお互いに助け合い、支えあつて生きていくからこそ、この世を生き抜くことができるのだ。あの時、小母さんが口にした一つ一つの言葉が、私の心に突き刺さつていった。

本から読み取れる、清太の心情は、意地悪な小母さんを責める気持ちに悩み後悔しているのではないかと感じる。この問いは、

「なぜ、節子は死ななければいけなかったのか？」という、解けない問いかけを繰り返しているのではないかと感じた。

この問いは、

「なぜ戦争では納得のできない死が次々と生まれてしまうのか。私たちはどこで間違えたのか。」と、私たちに向けられた永遠の問いかけのように思えた。清太は尊敬する父の威厳ある姿を思い出していた。その戦争は、家族の命を奪い、

人々の心から良心を奪った。戦争を恨みたい。しかし、戦争で散った人々の意を無下にすることはできない。このジレンマを残された者たちは抱えていくことになるのだ。

この本を読んで私は、戦争という極限状態の中で、火垂るの墓に出てくる登場人物たちは、心の余裕をもつことができなかったことに心の奥底が響いた。戦争と戦う苦しさや身に染みて感じられた。この本は、兄妹が戦争中にでもたくましく生きる話を物語っているだけではなく、戦争の苦しさや、その時代に生きる人々の気持ちを深く描いているのではないかと感じた。現在、私たちが生ききる世界において戦争を無くすことは不可能なのか。それを考えることが我々人類にとって大切なのではないだろうか。そんな今だからこそ、私たちは、火垂るの墓の時代に生きて死んでいった人々に想いをよせ、今やるべきことは一体何なのか考えていくべきだと強く感じた。